

【研究資料】

樺太野球史の一断面 —『樺太野球史』を手掛かりとして—

富田 幸祐

日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所

History of Baseball in the Karafuto: An analysis of *the Karafuto-yakyushi*

TOMITA Kosuke

Abstract: The purpose of this study is to analyze “*Karafuto-yakyushi*” to determine the history of baseball in Karafuto. “*Karafuto-yakyushi*,” authored by Shojiro Ono, was published in 1940. The book contains records of baseball in Karafuto from 1929 to 1938. It primarily focuses on the performance of baseball teams in the city of Toyohara. However, it also includes records of youth baseball and baseball in cities other than Toyohara. Additionally, the book also contains critiques written by Ono, making “*Karafuto-yakyushi*” not only a collection of records, but also a reflection of the landscape of the Karafuto baseball from Ono’s perspective.

要旨: 本研究は『樺太野球史』の内容を分析することで、帝国日本の植民地であった樺太における野球の展開について、その一端を明らかにすることを目的とする。『樺太野球史』は小野庄次郎によって執筆され、1940年に発刊された。1929年から1938年までの樺太における野球の記録が掲載されていて、大会やチームに関する情報を手に入れることが出来る。主たる内容は豊原における社会人野球チームの野球の記録だが、少年野球や豊原以外の樺太の都市における野球に関する記録も掲載されている。また本書には、記録だけでなく小野によって書かれた批評が掲載されており、『樺太野球史』はただの記録集ではなく、小野庄次郎という人物が見た樺太野球界の風景を映し出しているといえる。

(Received: April 1, 2022 Accepted: June 1, 2022)

Key words: Shojiro Ono, History of sports in the Karafuto, Toyohara city

キーワード: 小野庄次郎, 樺太スポーツ史, 豊原

この樺太のやうな田舎に、豊原のやうな片田舎に於て、野球でもなかったら、なんの楽しみがあつて生きてゐるだらう (小野, 1940, p. 199)。

はじめに

戦前の日本は台湾、朝鮮半島や関東州そして樺太を植民地としていた。1930年9月の満洲事変以降、日中戦争、アジア太平洋戦争と侵略戦争が立て続いた時期には、その版図を一時的に中国大陆、東南アジアや太平洋諸島に拡大する。日清、日露戦争を経て、植民地獲得の野心をアジアに向け続けたその歴史はまさしく日本が「帝国」であったことの証左であるといえよう。こうした「帝国」の版図拡大は当然ながら日本のス

ポーツ界の地理的拡大を促した。高嶋・金 (2020) が取り上げたように、帝国日本のアスリートはその版図内を移動し各地でスポーツを実践した。

帝国日本における植民地と野球に関わる研究は朝鮮、台湾、関東州を対象として進められてきた (金光・天田, 2001; 林, 2012; 川西, 2014; 小野, 2017; 坂本, 2020; 高嶋, 2021)。戦前の中等学校野球大会 (現在の高校野球) には朝鮮、台湾、関東州から代表校が出場し、台湾代表として中等学校野球大会に出場した嘉義農林は1931年に準優勝した。また都市対抗野球大会では1927年の第1回大会から1929年の第3回大会にかけて満洲倶楽部および大連実業が優勝をしている。こうした内地に限定されない野球大会のありよう

は、帝国日本という空間の存在をスポーツの場に置いて可視化するものであった。

樺太での野球の展開については、会田（2012, 2015, 2018）によって諸事実が明らかにされている。会田は『樺太日日新聞』や『小樽新聞』に掲載された樺太における野球に関する記事を網羅的に収集、整理して、樺太での野球の展開の中心的存在として企業、官公庁、旧制中学校があること、1921年から樺太日日新聞社が主催した全島樺太野球大会が開催されたこと、また1929年からは小樽新聞社主催の野球大会に樺太のチームにも出場権が与えられ全道樺太野球大会として開催されていたことを明らかにした。会田の研究成果によって、樺太でも野球が組織化のもと実施されていたという事実が浮かび上がってくる。だが他の植民地における野球の研究を見ると、新聞資料だけでなく同時代に出版された野球史や戦後にまとめられた記録などの活用^{注1)}、そしてさらなる一次史料の収集が行われると共に研究が進展している。このことを踏まえれば樺太における野球史を明らかにするうえでも、その典拠を新聞に限らず、よりいっそう一次史料の収集を行うと共に、分析を行うことは不可欠であるといえよう^{注2)}。

そこで本稿では、小野庄次郎によって執筆された『樺太野球史』を主たる史料として樺太における野球の展開を明らかにする（図1）。『樺太野球史』は1940年に発刊され、樺太野球の展開を体系的にまとめた管

見の限り唯一の書籍である。その史料的な限界はあれど樺太における野球の歴史的展開を知る重要な手がかりを与えてくれるものである。『樺太野球史』に記載の内容について整理、分析を行い、樺太における野球の展開の素描と論点を見出すことを本稿は意図するものである。

基本的に本稿は『樺太野球史』の記載の内容に沿って構成される。すべての記述に典拠を記すと煩瑣となるため、『樺太野球史』からの引用については直接引用のみ出典を表記する。『樺太野球史』以外の文献からの引用については直接引用か否かを問わず出典を表記する。なお本文中、直接引用を除いて西暦に表記を統一する。

1. 『樺太野球史』の著者及び書誌情報について

1-1. 小野庄次郎について

著者は小野庄次郎といい、樺太庁通信課の野球部に所属していた人物である。小野は自身の素性について、樺太にやってきたのが1930年だと『樺太野球史』の中で述べている以外、出身地や生年について言及がないが、秋田県出身であると考えられる。というのも『秋田魁新報』には、1930年1月から1931年12月にかけて秋田商業中学野球部出身の同姓同名の人物による寄稿が掲載されている^{注3)}。この人物の肩書は、1930年1月の寄稿においては「秋商野球部」（秋田魁新報、1930）であったが、その後肩書の記載が確認できる1931年8月になると「在樺太」（秋田魁新報、1931）と変わっている（図2）。このことは上述の小野の来樺時期とも大きく見れば符合する。また『秋田魁新報』の寄稿には、樺太の状況や野球に関するものがある。さらには、樺太連盟の引揚者名簿を確認すると樺太庁通信課に務めていた小野庄次郎の戦後の所在地が秋田県新屋となっている（全国樺太連盟、1965, p.36）。そして戦後、新屋に住んでいた小野庄次郎は、東北パルプ株式会社に勤めつつ『雄物川畔』という私小説を出版している。『雄物川畔』の前書きには小野が樺太に住んでいたことが記されている（大島、1951, p.1）。

以上から『樺太野球史』を著した小野庄次郎は秋田県出身で、秋田商業中学では野球部に所属していた。その後樺太に渡り、樺太庁通信課に勤める傍ら、通信課の野球部に所属した。戦後は秋田へと戻り、東北パルプ株式会社において働いていた人物である推測される。年齢は1930年前後に秋田商業を卒業したと考えると1940年の時点で30歳前後と思われる。また新聞への寄稿や、私小説の出版などからは文化活動に対する意欲が高かった人物であるともみてとれよう。

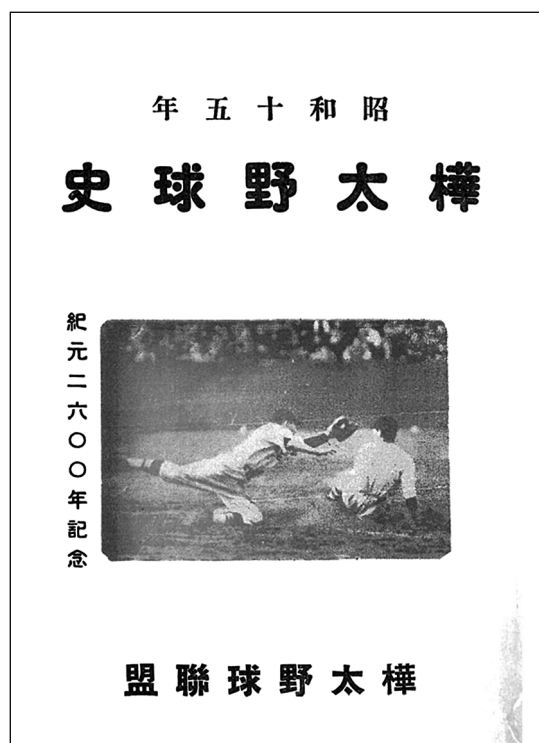


図1 『樺太野球史』表紙

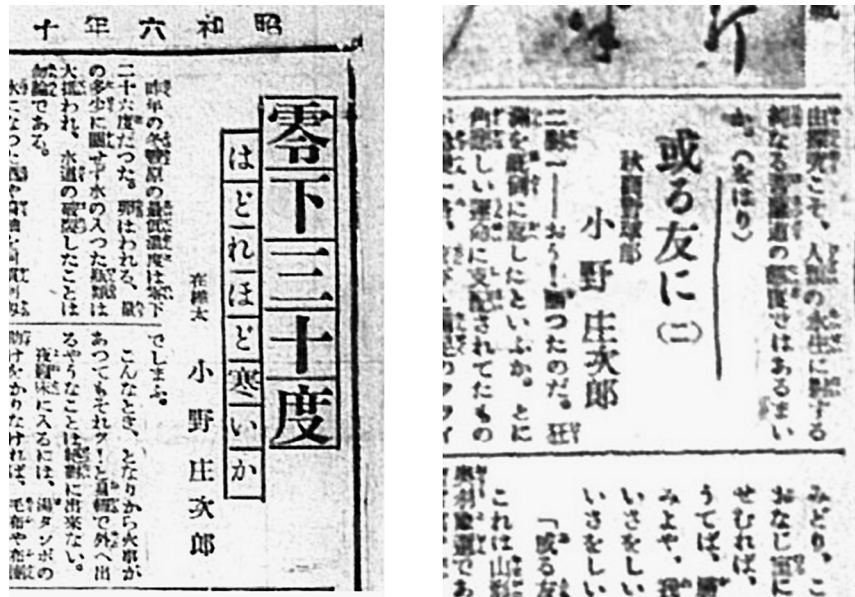


図2 『秋田魁新報』に掲載される小野庄次郎の来歴（左・在樺太、右・秋商野球部）

1-2. 書誌情報

『樺太野球史』は奥付によると1940年11月28日に印刷、1940年11月30日に発行となっている。印刷は樺太刑務所印刷部で行われ、発行所は樺太野球連盟である。総頁数は478頁で、販売価格は2円50銭であった。発行部数については定かではない。現存を確認できるのは北海道立図書館内敷設の北海道立文書館北方資料室所蔵のもののみである^{注4)}。

『樺太野球史』の目次は表1の通りである。昭和3(1928)年以前は一つの章にまとめられていて、昭和4(1929)年から昭和13(1938)年がそれぞれ1年ごとに章立てされている。

昭和13(1938)年までの各章については、小野が通信課野球部に所属し、豊原を拠点としていたことから、豊原における社会人野球チームの試合結果と戦評が主な記述内容となっている。『樺太野球史』の後半部では、少年野球や知取、本斗、眞岡、恵須取が章立てされていて、社会人野球チーム以外の記録、そして豊原以外の地方における野球史が掲載されている。

小野によれば、掲載されている内容は『樺太日日新聞』、『樺太毎日新聞』等の新聞記事や通信課野球部そして樺太庁鉄道野球部のスコアブックを用い、執筆は数名の手伝いを得て行われたという。『樺太野球史』に掲載されている試合の中には、会場、インニング毎の経過、打数、安打、三振、四球、盗塁、失策の各合計数、主審、塁審、試合の開始時刻と終了時刻が克明に記述されているものもあり、詳細なデータはスコアブックを活用したものだと考えられる。ただし新聞にもスコアブックにも記録が残っていないものや、著者である

小野が現場におらず状況がわからないものなど、記載することのできない試合も多々あったという。このことは本文中でもたびたび言及されており、例えば次の通りである。

この二日間にわたっての庁鉄及び本庁の明治大学との接戦を、ほんとうに精しくかいて読者に読ませたいのだが、残念なことに、どこの新聞にも試合経過を書いたものはなく、またスコアブックもない。即ち手のくだしやうがないのである。実は、この二日間の明大との接戦を二日間塁審をした中野君から責任をもって書いてもらふことにし、また、僕は次に来島した桐生高工との対戦について書くつもりだったが、試合経過を書いた記録がない以上は書けないのである、或は鉄道の手島氏からでも書いてもらふか—とも考へたのだが、やはり記録がない以上は満足にはかけないし、記憶ばかりたどって書くことは非常に困難なので依頼するのをよしたわけである。(中略) 一体、僕は、この樺太野球史を書くについて、一番困難で、多くの労力と時間を費したのは、材料の蒐集=即ち記録の収集であった。これさへ完全であれば、もっと時間にも余裕があり、僕の記憶をたどっても過去の試合についても、面白く書けただらうが、何しろ、時間があまりないので、書き直しをしたり、また読み直さうと思ったり—さうしたいろ—なことは絶対に出来ないだらうと思ふにいたった。そこはくれぐれもかんべんしていただかねばならぬ。それに、明大はオール豊原とも試合をしたさうだが(僕はこのとき豊原にゐなかったので知

表1 『樺太野球史』目次

見出し	頁
野球から受ける教訓:猪股 猛	序1
野球の思出:伊與田 章一	序2
「樺太野球史」の発刊を讃ふ:佐藤 未蔵	序7
樺太野球史を祝す:小松 誉重	序9
序:小野 庄次郎	序10
樺太野球史草分時代(昭和三年迄)	1
樺太野球界の黄金時代(昭和四年)	14
樺太野球史昭和五年	52
樺太野球史昭和六年	68
樺太野球史昭和七年	113
樺太野球史昭和八年	136
樺太野球史昭和九年	200
樺太野球史昭和十年	216
樺太野球史昭和十一年	230
樺太野球史昭和十二年	267
樺太野球史昭和十三年度一豊原の巻	305
全島少年野球大会優勝チーム年度別	371
樺日主催全島少年野球大会回顧座談会	372
少年野球史昭和四年	385
少年野球史昭和五年	395
少年野球史昭和六年	405
少年野球史昭和七年	425
知取野球史(昭和二年より十三年まで):佐藤和夫	442
本斗野球史:丹野良次	455
真岡野球史:内藤勉	466
恵須取野球史(昭和四年頃より):梶原一郎	472

らないが)その記録は文字通り絶対にないので何も書くことが出来ない。せめて僕がこの試合をみてゐるならば、なんとかして、いくらか書けるのだが、繰り返して云ふが何もかも残念なことである(小野, 1940, p. 224)。

1-3. 寄稿文と序文

『樺太野球史』の冒頭,「序」には発刊を祝し4名の寄稿文が掲載されている。寄稿文を寄せたのは豊原駅長の猪俣猛(中央情報社編, 1941, p.169), 豊原郵便局長の伊與田章一(中央情報社編, 1941, p.164), 東京日日通信部記者(在豊原)であり樺太軟式野球連盟常任理事の佐藤未蔵(小野, 1940, p.序8; 樺太敷香時報社編, 1937, p.401), そして小松誉重という人物である。この内, 猪股による寄稿文は祝辞というよりかは, 訓示に近い内容であるが, その他の3名は『樺太野球史』を執筆した小野に対する謝辞や, 出版が1940年の皇紀2600年あたることから, そうした時局を反映した言葉が並んでいる。また各々が自身と野球に関わる雑

感を書き記している。

4名からの寄稿文に続いて, 小野による序文である。「或る人にすすめられて『樺太野球史』を書く気になり, 其の一頁をインクに染めたのは昭和十三年の秋であった」(小野, 1940, p.序10)が, 執筆に際する率直な気持ちを次のように記している。

かうして序文のようなものを書き出しましたが, あまりに書くべきものが多く, 何から書いていいのかわ, 何をさきに書いていいのかわ分からなくなつてゐる(中略)編集してゐる間には, あれも書きたい, これも言ひたいと考へ, またそれを書くつもりでゐたが, ペンをとると何も書けない—書けなくなつてしまひました(小野, 1940, p.序10)

続けて小野は今後の展望についても語る。今後は樺太の野球に関する「年鑑」を発行したいこと, そして「年鑑」のあり方を次のように望んでいた。

樺太全島の野球選手, 野球チーム, 野球ファンの親睦機関として——選手なり, 野球ファンの誰しもが思ふことを発表し, また, 野球試合を批評したり, 希望をのべたり, 意見をのべたり, そうしたことを自由にこの「樺太野球史」を通じて言ひあったらいではないか——と思います(小野, 1940, p.序11)

小野は今後も継続的な野球に関する雑誌の発行を願っていた。その際, 目指すのはただ記録を羅列するものではなく「誰しもが思ふことを発表し, また, 野球試合を批評したり, 希望をのべたり, 意見をのべたり」できる「親睦機関」となるようなものであった。この言葉を反映してか『樺太野球史』は記録がただ羅列されているデータブックに終始しているわけではなく, 小野による批評が随所にちりばめられている。批評は『樺太野球史』の中で130箇所登場し, 一言で終わるときもあれば3頁にまたがる長文になるときもある。その内容は, 転載, 引用した新聞記事に対する批評や, 試合の感想や回顧的なもの, そして小野の野球観を表すものに大別することが出来る。

この他にも小野は樺太野球連盟へ「野球の功労者を何かの形式で表彰していただきたい」と要望したり, 本書における自身の呼び方をどうするかが「一番困った」こととして挙げていたり, また出版に際し樺太野球連盟が「どれほど金を補助してくれるか, はっきりしてくれなかつた」こと, 樺太野球連盟の理事の人数や氏名がはっきりしないために掲載することができなかったこと, この序を書いている段階では「連盟総裁の長官, 会長の内務部長, 理事長の土木課長の写真と

原稿がない」ため発刊が最後の最後に遅れていることを嘆いている（小野，1940，pp.序11-15）。

以下『樺太野球史』の内容について、樺太（豊原）野球界の年間スケジュール、樺太少年野球野球史、樺太地方野球史と分けて、内容を把握する。

2. 樺太（豊原）野球界の年間スケジュール

『樺太野球史』には1929年から1938年までに樺太の野球チームが関わった試合が196試合掲載されている。なお1929年以前は新聞の情報が少なく、スコアブックのような記録も残されていないため、試合結果が分からないものが多いという。そのため小野はこれ以前を「草分時代」（小野，1940，p.1）としている。

196試合の内、北海道への遠征試合を除いて、そのほとんどは豊原において実施された試合の記録である。また上述の通り、ここに記載されている試合が樺太そして豊原で行われたすべての試合を表しているわけでもない。1938年の試合数が特に多くなっている点については、出版直前のことであり記録が多く残っていることがまず挙げられるだろう。また1935年以降は軟式球での試合記録が増加している。

史料の限界があるとはいえ、各年の初出試合と最終試合の日程からは豊原における野球の年間スケジュールを掴むことができる（表2）。おおよそ6月から9月にかけてが野球シーズンであったようだ。小野も6月には「樺太もそろそろ野球シーズンとなりかけた」（小野，1940，p.230）と言及している。このことは気象状況からもうかがい知ることが出来る。参考までに1935年の豊原の気象状況を見ると、6月から9月にかけて平均気温が10℃を超えていて、その期間の前後、5月と10月には既に降雪が記録されている（表3）（豊原町役場，1935，頁記載なし）。当然ながらこの時期の野球は屋外グラウンドで実施される。グラウンドのコンディションを考慮すれば、降雪そして積雪した中で野

球を実施するのは難しい。豊原では6月から9月のわずか4カ月という短い期間が主たる野球シーズンであったと考えられるだろう。小野は「野球は、豊原の夏における何よりの清涼剤であり、唯一の慰安である」（小野，1940，p.199）と語り、寄稿文を寄せた小松も「夏の間野球がなかったら何も楽しみがない」（小松，1940，p.9）と書き残す。豊原において野球は「夏」のスポーツであった。

各年の記録から知ることの出来る豊原野球界のスケジュールであるが、まず1934年以前（主として硬式球による試合記録）から見てみたい。5月から6月にかけて、島外のチームとの試合や東京日日新聞主催の都市対抗野球大会予選が実施、6月から7月にかけて豊原野球連盟春季リーグが開催、その前後に小樽新聞主催北海道樺太野球選手権予選大会が行われている。8月には遠征チームの来島があり、9月に入ると豊原野球連盟秋季リーグが開催となる。遅くとも10月中にはシーズンオフを迎える。1935年以降、軟式球期になる

表3 1935年の豊原の気候

月	平均気温	快晴	雲	雪	降水日数
1月	-12.5℃	5	13	22	18
2月	-12.1℃	3	10	18	14
3月	-6.0℃	3	13	22	18
4月	1.3℃	3	14	14	16
5月	6.6℃	2	15	4	15
6月	11.8℃	2	16	—	12
7月	16.4℃	2	17	—	14
8月	17.7℃	2	19	—	16
9月	13.9℃	3	13	—	16
10月	7.3℃	4	12	5	17
11月	-0.7℃	1	16	17	19
12月	-8.1℃	3	14	23	19

豊原町役場（1935，頁記載なし）を記述に基に筆者作成

表2 『樺太野球史』に記載された各年の試合数

年	試合数	各年記載の初出と最終の試合日程
1929(昭和4)年	10	8月15日～8月19日
1930(昭和5)年	11	5月31日～7月20日
1931(昭和6)年	27	6月28日～9月27日
1932(昭和7)年	18	6月18日～9月18日
1933(昭和8)年	27	6月4日～9月3日
1934(昭和9)年	12	7月7日～9月8日
1935(昭和10)年	10(4)	6月22日～8月4日
1936(昭和11)年	19(14)	6月27日～10月11日
1937(昭和12)年	19(17)	7月10日～8月23日
1938(昭和13)年	43(37)	7月9日～9月4日
※括弧内は軟式野球の試合数		

小野（1940，pp.14-370）の記述を基に筆者作成

と7月に樺太日日新聞主催の軟式野球大会と小樽新聞主催の軟式野球大会が、8月に全島都市対抗野球大会、その他、軟式野球連盟主催の全島大会や、野球リーグ戦の開催が記録として残されている。

なお会田（2015）も明らかにしているように、樺太では樺太全島野球大会が1921年から開催されている。『樺太野球史』では1929年の第9回大会に関する記録が残るのみで、最後の開催となった1930年の第10回大会については記録が残っていない。

2-1. 豊原硬式野球リーグ（春季、秋季）

豊原では6月から7月にかけての春季リーグと9月には秋季リーグが豊原野球連盟が主催となって開催されていた。ただし『樺太野球史』の記載からはこのリーグ戦が春季、秋季ともに毎年行われていたのかを確認することができず、また1934年を最後に開催を確認することはできない。

春季、秋季リーグに参加していたのは主に樺太庁野球部（本庁）、樺太庁鉄道（庁鉄）、通信課野球部（通信）の3チームで、その他に豊原郵便局や豊原中学などが一時参加していたようである。『樺太野球史』によれば最も参加チーム多かったのは1931年の秋季リーグである。5チームが参加し、毎週土日、及び祝日に開催されていた（表4）。

2-2. 小樽新聞社主催全道樺太実業野球大会参加

全道実業野球大会は小樽新聞の主催で1922年に始まった。当初は北海道の大会であったが、1929年の第8回大会から樺太からもチームが参加するようになり、全道樺太実業野球大会となった（表5）。小野が「一番大事な、各年度の最大目標たる小樽新聞社主催の樺太予選」（小野、1940, p.90）や「小樽新聞社主催の野球大会を目指して、雌雄を決したものだ」（小野、1940, p.338）と『樺太野球史』に書き残すように、重

表5 全道樺太実業野球大会樺太予選優勝（代表）チーム一覧

年	回	優勝
1929年	第1回大会	通信
1930年	第2回大会	庁鉄
1931年	第3回大会	庁鉄
1932年	第4回大会	庁鉄
1933年	第5回大会	通信
1934年	第6回大会	庁鉄
1935年	第7回大会	全豊原（庁鉄主体）
1936年	第8回大会	全豊原 ※予選なし
1937年	第9回大会	全豊原 ※予選なし
1938年	第10回大会	全豊原 ※予選なし
1939年	第11回大会	不参加
1940年	第12回大会	全豊原

小野（1940, 頁記載なし）の記述を基に筆者作成

要な大会であった。なお樺太からの参加がなぜ認められるようになったのかについては定かではないが、会田（2018, p.69）は樺太にて野球が盛り上がっていることを受けて、小樽新聞社が受け入れたのではないかと推測している。軟式球が広まった際には小樽新聞社が樺太で軟式野球大会を主催しており、小野も下記の通り、小樽新聞社の樺太野球界に対する貢献度の高さを書き残している。このことから会田の推測は妥当なものではないかと考えられる。

小樽新聞社は樺太野球界に絶大なる貢献をしてゐる。逆説を好むわけでは無いが、小樽新聞社の貢献に依って、樺太の野球界が今日のやうに、盛んに成ったと言っても、決して過言ではないであらう（小野、1940, p.338）。

2-3. 都市対抗野球大会予選大会

都市対抗野球大会は1927年に始まった日本の社会人野球チームの全国大会である。樺太では1934年に初めて予選大会が行われた。樺太予選を勝ち抜いたチー

表4 1931年豊原硬式野球秋季リーグ日程表

1931年豊原秋季リーグ日程				
9月5日	土		本庁—庁鉄	豊原中学—通信
9月6日	日		本庁—庁鉄	豊原中学—通信
9月12日	土		豊原局—本庁	庁鉄—豊原中学
9月19日	土		通信—豊原局	本庁—豊原中学
9月20日	日		通信—豊原局	本庁—豊原中学
9月24日	木	秋季皇霊祭	本庁—通信	庁鉄—豊原局
9月25日	金		本庁—通信	庁鉄—豊原局
9月27日	日		豊原中学—豊原局	庁鉄—通信
10月3日	土		豊原中学—豊原局	庁鉄—通信

小野（1940, p.108）の記述を基に筆者作成

表6 都市対抗野球大会樺太予選優勝（代表）チーム一覧

年	回	代表(優勝)
1934年	第1回大会	全豊原(庁鉄主体)
1935年	第2回大会	本庁
1936年	第3回大会	庁鉄
1937年	第4回大会	全豊原 ※予選なし
1938年	第5回大会	全豊原 ※予選なし
1939年	第6回大会	不明 ※予選なし
1940年	第7回大会	全豊原 ※予選なし

小野（1940、頁記載なし）の記述を基に筆者作成

ムが北海道予選へと参加するシステムとなっていて、本大会出場には北海道予選を勝ち抜く必要があった。1937年以降は予選会が開催されることはなく、北海道予選に参加していたようである（表6）。

1937年、全豊原は社会人野球チームとして有名な函館大洋倶楽部を破り決勝にまで残った。本大会日前まで行ったが、決勝で旭川鉄道に敗れ、本大会出場を逃した。翌年の1938年も全豊原は北海道予選の決勝にまで勝ち進んだ。しかし決勝で函館大洋倶楽部に敗れた。

2-4. 島外との交流

樺太には例年、島外から遠征チームがやってきていた（表7）。硬式球による試合記録が主となる1930年から1935年にかけて延べ15チームが樺太にやってきていて、一番多い年は1933年のことである。1936年には軟式球による試合として稚内鉄道の来樺が記録されている。また樺太のチームとの対戦記録はないが、1938年にはセネタース対イーグルスの職業野球の試合が実施されている。

1932年に来樺した函館大洋倶楽部は1907年に創設されたクラブチームである。この当時、社会人野球の三賞の久慈賞の由来にもなった久慈次郎が選手として活躍しており、人気のチームであった。函館大洋倶楽部の来樺について小野は以下のように記す。

観衆は定刻前より入場口に長蛇の如く列をなしてゐた。そしてしまひには、前売券を買つてゐながら、何故入場させないとか、大泊、真岡、川上、落

合、瑠多加、野田、或は知取、恵須取、敷香からわざ〜きたのだからどうかいれてくれとか、入場料二倍でもいい、からのむとか、といつてゐるものもゐた。また、なんだかんだと騒いで入場口で喧嘩してゐるものもゐて、警官に怒鳴られてゐるものもゐた。とにかく大洋倶楽部が来たといふのでグラウンドの周囲は豊原神社や、樺太神社の祭典のときにもまして、人出が多くにぎやかで、野球ならでは見られない光景であつた。試合がはじまると、観衆はかたずを飲んで見いつて、一つの尊厳な感じがグラウンドに満ちてゐた。一挙手、一投足、一打に観衆は魅惑され、美技に酔はされた（小野、1940、p.115）

小野に言わせれば、「外来チームとの対戦は豊原の人々にとっては唯一の娯楽であつた」（小野、1940、p.128）。しかしこの「唯一の娯楽」に対し、小野はある批判を述べている。それは樺太にやってきたチームに対してではなく、この試合を計画し運営していた豊原野球連盟に対するものである。

連盟では試合させておいて、其後選手に何一つ酬ひた訳ではないし「放つたらかして」をいたからである（中略）外来チームが来て、例えば札鉄チームが来たからとて、選手一同を会して雑談をやるわけでもないし、入場料こそとるが、選手には知らぬ振だ（中略）外来チームはたくさん樺太へ呼んだが、かつて豊原のチームを島外へ出したことがあるだらうか（中略）外来チームが来て、雑談会をやるのは連盟の理事とか、幹事とかばかりで、選手にはそんなことがなかった（中略）まさに僕ら選手は「あやつり人形」だつた訳だ（小野、1940、p.135）

遠征チームは来るが、自分たちが島外へ行つて試合する機会ほとんどないこと、「雑談会」は連盟の理事や幹事といった人が行い、選手達に機会がなかったこと、自分たちは理事や幹事の「あやつり人形」と化していたのではないかと批判を述べている。

表7 遠征チーム一覧（1935年まで）

年	遠征チーム
1930年	札幌鉄道局(札鉄)
1931年	名寄鉄道、関西学院、仙台鉄道局
1932年	大洋倶楽部、旭川鉄道野球団、小樽体協
1933年	北海道中学校野球部、室蘭鉄道、上砂川三井鉱業所、早稲田、札鉄
1934年	名寄鉄道
1935年	明治大学、桐生高工野球部

小野（1940、pp.52-230）の記述を基に筆者作成

表8 全島都市対抗軟式野球大会参加チーム一覧

年	出場都市
1935年	豊原、大泊、眞岡、本斗、落合、野田、瑠多加、泊居
1936年	豊原、眞岡、本斗、落合、泊居、知取、敷香、元泊、恵須取
1937年	豊原、大泊、本斗、落合、泊居、内幌、
1938年	豊原、大泊、眞岡、本斗、落合、瑠多加、泊居、知取、内幌

小野（1940, p.227, pp.257-258, p.298, pp.343-347）の記述を基に筆者作成

2-5. 全島都市対抗軟式野球大会

1935年から樺太全土のチーム対象とした軟式野球大会が記録として残る。樺太野球連盟が主催となり8月に開催されていたのが樺太全島都市対抗野球大会である。試合記録からは大会会場は例年豊原公園球場であったことが伺える。1935年は8チーム、1936年は9チーム、1937年は6チーム、1938年は9チームが樺太の各地方において開催された予選を勝ち抜いて参加した（表8）。その他、樺太毎日社主催全島軟式野球大会も同じような大会であったと推測されるが、『樺太野球史』には1936年の決勝戦の記録のみが掲載されており、参加チームや翌年以降開催されていたのかについては不明である。

2-6. 豊原軟式野球リーグ

豊原で軟式野球リーグが開催されていたことが、1936年シーズンから『樺太野球史』にて確認することができる。1938年にはAリーグ、Bリーグと2つに分けて実施されていた。Aリーグに参加したのは3チームであったようで、1938年8月25日、9月2日、9月4日に試合が行われた。優勝チームは通信課野球部である。一方Bリーグについては参加チーム等の詳細については不明である。「Bクラス、リーグ戦は七月二十四日より九月四日と言ふ足掛け三ヶ月に渡つて行はれた。僕は今それを一々書けないし、又書かれない」（小野, 1940, p.363）と小野は記して、一部の試合のみが掲載されているにとどまっている。

3. 樺太少年野球史

『樺太野球史』には、樺太における少年野球史として樺太日日新聞主催の全島少年野球大会の記録が掲載されている（表9）。全島少年野球大会は、少年の部と幼年の部に分けて開催されていた。それぞれ1924年に第1回大会が開催され、1932年の第9回大会まで開催されたが、この年を最後に中止となった。大会が1932年で終わってしまった背景には野球統制令の存在があったという。その後、幼年の部は1939年に第10回大会として再開した。『樺太野球史』には1929（昭和4）年から1932（昭和7）年までの試合記録が『樺太日日新聞』から転載されている。この期間、豊原の中央球場にて大会は開催されていた。参加チームは例年10チーム前後で、その陣容からは豊原に限らず全島を対象とした大会であったことが伺える。

4. 樺太地方野球史

著者である小野庄次郎が豊原を拠点にしていたことから、樺太の豊原以外の都市における野球史についてそれぞれ別の人物によって執筆がされている。取り上げられている都市は、知取（佐藤和夫）、本斗（丹野良次）、眞岡（内藤勉）、恵須取（梶原一郎）である。小野による著述と同様、主な内容としては各都市で行われた大会、試合の結果について書かれている。

4-1. 知取野球史

知取野球史は佐藤和夫という人物の執筆となっている。執筆にあたっては「新旧人野球座談会」を開催

表9 全島少年野球大会参加校一覧（1929年～1932年）

年	幼年部（参加校数）	少年部（参加校数）
1929年	豊原一校、豊原二校、豊原三校、大泊小学校、落合小学校、船見小	豊原一校、豊原中、大泊中、落合小
1930年	豊原第一小、豊原第二小、豊原第三小、大泊小、船見小	豊原第一小、大泊小、落合小、千歳小
1931年	豊原一校、豊原二校、豊原三校、大泊、落合一校、船見	豊原一校、大泊、落合一校、瑠多加、知取
1932年	豊原一校、豊原二校、豊原三校、旭ヶ丘、大泊、落合二校、船見、瑠多加	豊原一校、大泊、落合、長濱、千歳

小野（1940, pp.385-440）の記述を基に筆者作成

し「現在居る往年の選手とファンの記憶を頼って球史らしいものを綴り合はせる事にした」（佐藤，1940，p.441）という。「記憶」の「綴り合はせ」によるおかげか知取野球史の章は各年の出来事が他の章よりも詳しく時系列に記述されている印象を受ける。

知取で野球チームが初めて結成されたのは1925年の夏で、富士製紙工場チームと炭鉱クラブが誕生し両チームによる対抗試合が行われた。翌1926年、長谷川四良という人物が巡査部長として着任すると、「野球熱が勃興し前年結成された富士、炭鉱両軍に加へ、町側にもチーム」（佐藤，1940，p.442）が誕生した。この町側が結成したチームはアマチュア倶楽部と呼ばれる。この3チームによる対抗試合は「技量は正に伯仲、熱戦を展開」（佐藤，1940，p.442）したという。1927年になると東樺日日新聞社が主催となって東海岸硬式野球大会が創設された（表10）。この大会は「東海岸野球界の最高權威」（佐藤，1940，p.442）と評されている。翌1928年になると樺太毎日新聞社が主催する知取軟式野球大会が始まる。第1回大会は町内ごとに1チームが編成され参加チーム数は18を数えたという。この大会には硬式経験者の参加を1チーム2名に制限するルールが設けられていて「純アマチュアの大い」（佐藤，1940，p.442）であったと綴られている。1931年、アマチュア倶楽部は知取青年団野球部に名称を変

更し、知取青年団、王子青年団、炭鉱青年団による硬式野球リーグ戦が始まった（表10）。三青年団によるリーグ戦は春秋二回開催されたというが、『樺太野球史』では秋の結果が分からない年が多く、秋は実施されていない可能性もある。1933年、知取軟式野球大会が東海岸軟式野球大会へと名称を変更した（表10）。これによって参加対象地域が拡大された模様で、落合から参戦した北秀が1934年と1935年連覇し、1936年は準優勝という成績を残している。1936年、全島都市対抗軟式野球大会開催を受け、知取体育協会が全島大会出場選抜野球大会を開催した。参加チームは丸彦、知取青年団、炭鉱青年団、王子青年団の4チームで、知取青年団が優勝し出場権を獲得した。知取青年団は知取代表として豊原で開催された全島都市対抗軟式野球大会に出場するも、一回戦で眞岡に敗れた。1937年、この年を最後に東海岸硬式野球大会の中止が決まる。また選手不足から炭鉱青年団が解散する。この影響か翌年の三青年団硬式リーグ戦は記録がなく、未開催であったと考えられる。また全島都市対抗軟式野球大会に全知取の編成が計画されるも実現に至らなかった。1938年、全島都市対抗軟式野球大会に知取青年団、王子青年団、炭鉱青年団から選抜した全知取を編成して参加、決勝まで進出するも本斗に敗れて優勝とはならなかった。また東樺日日新聞社主催で東海岸少

表10 知取における主要大会優勝チーム一覧

年	東海岸硬式野球大会	知取軟式野球大会 (東海岸軟式野球大会)	三青年団硬式野球リーグ
1927年	富士製紙工場	—	—
1928年	アマチュア倶楽部	※優勝チーム不明	—
1929年	富士製紙工場	※優勝チーム不明	—
1930年	アマチュア倶楽部	第一校職員	—
1931年	全数香	第一校職員	春:炭鉱青年団 秋:炭鉱青年団
1932年	知取青年団	第一校職員	春:知取青年団 秋:未開催
1933年	王子青年団	知取青年団	春:知取青年団 秋:記載なし
1934年	全数香	北秀	春:王子青年団 秋:記載なし
1935年	知取青年団	北秀	春:王子 秋:記載なし
1936年	知取青年団	知取青年団	春:知取青年団 秋:記載なし
1937年	王子青年団	優勝チームなし(日没中断も再試合が行われず)	春:王子青年団と知取青年団が同率1位 秋:記載なし
1938年	—	知取青年団	—

佐藤（1940，pp.441-455）の記述を基に筆者作成

年野球大会が開催された。

知取においては知取青年団と王子青年団が強豪であったと考えられる。特に「町側」のチームとして始まった知取青年団は、ほぼ毎年主要大会のどれかで優勝し、1936年にはすべての大会を制覇している。

4.2. 本斗野球史

丹野良次によって本斗野球史の章は執筆されている。その始まりは1922年である。「本斗の町にも野球熱が出て、各先輩諸氏はチーム編成に大童となり種々と奔走」(丹野, 1940, p.455)した結果、「町側チーム、学校側チームを作って」(丹野, 1940, p.455)試合が行われたという。この時期、真岡時事新聞社が主催する西海岸野球大会が開催されており、本斗も同年から毎年参加した。1934年まで一度も優勝できず。これを丹野は「グラウンドの不完備と野球熱の微々たるために人不足」(丹野, 1940, p.456)が原因であると考察する。

野球の環境がなかなか整わない時期が続く中、1930年に軍艦朝日が本斗に寄港し、朝日の乗組員と本斗で試合が行われた。これに「町のファンは珍しい試合を見んものと」(丹野, 1940, p.456)会場となった「築港の埋め立て地」(丹野, 1940, p.456)に集り観戦した。そして「遠征チームの刺激に野球熱が急に出てチームの数も増して来た」(丹野, 1940, p.456)という。同年、樺太新聞社が主催する西海岸野球大会の第1回大会が本斗で開催され、参加チームは8チームを数えた(表11)。1935年には真岡時事新聞主催西海岸野球大会

で、全本斗チームが編成されてこの大会で初めて優勝することが出来た。また同年第一回全島都市対抗軟式野球大会に全本斗チームが参加し準決勝まで進んだ。この年の成績が刺激となり「本斗野球人間に一層の熱は高められ」(丹野, 1940, p.457)、全本斗主催の町内アマチュア野球大会が同年9月に開催された(表12)。『樺太野球史』の記述からはこれ以降、本斗では地方大会や全島大会には町内大会以外の大会に参加する際には全本斗が編成されていることが伺える。町内大会を選抜大会として位置づけ、全本斗を編成するシステムを構築したようである。その結果か、全本斗は1936年と1938年の全島都市対抗野球大会で優勝する好成績を修めている。丹野は「昭和13年はオール本斗の全盛と各アマチュアの進歩」(丹野, 1940, p.465)が見られる年であると評した。

4.3. 真岡野球史

真岡野球史は内藤勉という人物によって執筆されている。真岡での野球の始まりとされているのは1920年である。それ以前は「統制あるチームもなく三角ベースの辻野球」(内藤, 1940, p.466)がこの地域では行われていたが、この1920年に村田一保、大谷武行の両名によって真岡連合というチームが結成され、さらに両名はこの後、新たにオールドボーイズというチームを組織した。このオールドボーイズには序に寄稿文を寄せた伊與田章一が真岡郵便局に勤務していたこともあり、参加していたという。真岡連合、そしてオールドボーイズが結成された後、真岡郵便局の野球チームで

表 11 樺太新聞社主催西海岸野球大会 (1930年～1934年)

年	回	優勝	参加チーム
1930年	第1回大会	セント	学校、林務署、支庁、セント、鉄道、運輸、若葉、鈴谷
1931年	第2回大会	学校	学校、林務署、支庁、セント、鉄道、運輸、若葉(※一部参加チーム不明)
1933年	第3回大会	セント	※参加チーム不明
1934年	第4回大会	太陽	学校、セント、鉄道、運輸、太陽、支林、全幌内(※一部参加チーム不明)

丹野 (1940, pp.455-465) の記述を基に筆者作成

表 12 本斗町内アマチュア野球大会 (1935年～1938年)

年	回	優勝	参加チーム
1935年	第1回大会	城南	城南、三四、水産、学校、ミドル、太陽、運輸
1936年	第2回大会	城南	城南、学校、太陽、支林、実業、スズヤ、アイアン
1937年	第3回大会	聖林	巨人(城南)、学校、ミドル、太陽、支林、アイアン、聖林
1938年	第4回大会	支林	城南、太陽、支林、聖林

丹野 (1940, pp.455-465) の記述を基に筆者作成

あるナインスターが、また教員の野球チームであるダイヤモンドが「神戸第一小学校長の努力」（内藤，1940，p.467）によって誕生した。4チームが出そろうと春秋2回の野球大会が開催されるようになったという。この対抗戦の開始年は定かではないが，1924年には4チームによる大会が開催されていることが『樺太野球史』の記述からは伺える。真岡郵便局の野球チームであるナインスターは1924年に名称をナショナル野球倶楽部に変更した。名称変更は，伊與田が真岡郵便局の局長に就任すると同時に行われ，伊與田は部長としてチームに「猛烈な練習」（内藤，1940，p.467）を積ませた。また同年には荒貝鉄道倶楽部が誕生した。荒貝鉄道倶楽部は徐々に実力をつけていき，「ダイヤモンドを蹴落してナショナル陣営を脅かす」（内藤，1940，p.468）ようになる。これが1927年から1929年ごろのことで，内藤はダイヤモンド，ナショナル，荒貝鉄道倶楽部の争いを「当町野球の黄金時代」（内藤，1940，p.468）と評している。1931年から樺太時事新聞社主催の西海岸軟式野球大会が始まった。この大会も毎年春秋2回の開催となっていたようである。上述したチームは硬式ボールを使用するチームのため大会には審判として大会に関わっていたという。しかしその後にはナショナル以外のチームが軟式に転向したため，ナショナルも軟式に転向することとなったという。軟式大会は「物凄い勢いをもって全町に潮満」（内藤，1940，p.468）したという。真岡には王子製紙会社があるが，1933年以降「工場内の運動熱が頗に熾んとなり」（内藤，1940，p.468），グラウンドを造営し，数多くの野球チームが組織されたという。内藤は王子製紙会社の代表的な野球チームとして「王星，ドクロ，オール王子」（内藤，1940，p.468）の3チームを挙げる。この中でもオール王子は，ナショナルを何度か破

る実力を持っているチームで，大会での優勝こそないが「やがて西海岸征覇時代を画し得るであらふ」（内藤，1940，p.468）と書き残している。

この他，「備忘雑録」として，判定をめぐる試合が中止となったこと。1922年に開催された真岡連合とナインスターの試合では，ナインスターが1点と取ったら勝利というハンデマッチが行われ，真岡連合は6点を奪いながらナインスターが1点を取ったため，ナインスターが勝利したこと。1935年の豊原での全島野球大会でナショナルがゾンネと対戦したが，試合中にゾンネの一塁手がナショナルのランナーを隠し球によってアウトにした。この結果，「当地方野球語の一つ」（内藤，1940，p.471）として隠し球が「ゾンネボール」という名称でこの地域では呼ばれていたことなど，真岡野球界のこぼれ話とでもいうべき内容が掲載されている。

また文末には「当町野球に貢献した人々」（内藤，1940，p.471）として12名の人物が挙げられている（表13）。

4-4. 恵須取野球史

恵須取野球史は梶原一郎という人物によって執筆された。梶原によれば恵須取では1929年ごろから野球が盛上がり始めたが，その頃は少年野球が中心であったという。北海道で開かれた大会に樺太西海岸地方代表として恵須取第二小学校が出場したのをきっかけに「野球熱が盛んになって来た」という。その後，1931年からあさひ新聞社が主催となった鶴城管内野球大会が始まる（表14）。この大会は硬式球によるものである。主な参加チームは，王子，大平，体協の3チームであった。1936年の大会から主催のあさひ新聞社が西海毎夕社と社名を変更したようで，この「西海毎夕社

表 13 真岡野球界に貢献した人物

氏名	真岡野球界での立ち位置	現在（1940年時点？）
村田 一保	真岡連合監督	
大谷 武行	真岡連合主将	本斗助役
伊與田 章一	ナショナル部長	豊原郵便局局長
片岸 岬	専属審判	
神戸 亀吉	第一小学校校長	
三島 義利	ダイヤモンド捕手	真岡支庁視学
山口 喜之助	ナショナル監督	逓信課
岩下 貞雄	樺太時事新聞社記者	真岡毎日社長
間野	専属審判	
小川 不二夫		樺太時事新聞社部長
庄司 光雄	荒貝鉄道監督	満鉄ハルビン保線区区長
中川 誠一	荒貝鉄道	真岡保線区技手

内藤（1940，pp.466-471）の記述を基に筆者作成

表 14 鵜城管内野球大会（1931 年～1938 年）

年	回	優勝	参加チーム
1931 年	第 1 回大会	ホームラン	王子、大平（鉱業所）、濱市街（体育協会野球部町側）、ホームラン、全鵜城
1932 年	第 2 回大会	王子	王子、大平、体協、ホームラン、鵜城（※一部参加チーム不明）
1933 年	第 3 回大会	体協	王子、体協（※一部参加チーム不明）
1934 年	第 4 回大会	王子	王子、大平、体協（※一部参加チーム不明）
1935 年	第 5 回大会	王子	王子、大平、体協
1936 年	第 6 回大会	王子	王子、大平、体協、鵜城
1937 年	第 7 回大会	王子（運輸）	王子（運輸）、大平、体協
1938 年	第 8 回大会	王子	王子、大平、体協

梶原（1940, pp.472-478）の記述を基に筆者作成

表 15 軟式野球大会

年	回	優勝	参加チーム
1936 年	第 1 回大会	王子運輸	王子運輸、王子マシン、大平、学校、ヤングスター、逋信、オーシャン、全鵜城ナインスター、武士、商店
1937 年？	第 2 回大会	王子	王子、武士、河川、補習、三菱協和、日曹、南濱、スパルタ、三菱塔路、三菱 B

梶原（1940, pp.472-478）の記述を基に筆者作成

西村社長の計らひ」（梶原，1940，p.473）によって同年から軟式野球大会も開始された（表 15）。1936 年は鵜城管内野球大会においては「観衆はグラウンドを埋め絶好の野球日和」（梶原，1940，p.473）を現出し、軟式野球大会も「観衆はりっすいの余地なきまで」（梶原，1940，p.473）集まったとして、梶原は「恵須取野球界の豪華版」（梶原，1940，p.473）であったと振り返っている。なおこの軟式野球大会は全島都市対抗軟式野球大会の予選会としての位置づけであった。予選会終了後、大会優勝チームの王子運輸の選手を中心に全恵須取チームが編成された。

この恵須取において王子製紙関連企業の野球チームが強豪として存在していた。詳しいチーム詳細は不明だが「王子」あるいは「王子運輸」と記載されるチームの優勝回数が群を抜いている。鵜城管内野球大会では 1932 年，1934 年，1935 年，1936 年，1937 年，1938 年と 6 回優勝を果たした。また軟式大会においても 1936 年，1937 年と連覇している。

おわりに： 小野庄次郎の見た／居た樺太野球界

以上、『樺太野球史』の内容を基に、樺太における野球史について素描した。著者である小野庄次郎が豊原在住であり、執筆当時から資料的な制約があったことを考慮すれば、これによって樺太野球史の総体が明らかになるわけではない。また執筆に際し『樺太日日新聞』などの新聞資料が転載、引用されて用いられているという点では、作成時期の違いはあれども会田による研究と大差ないことを意味するのかもしれない。しかし小野自身が 10 年近く樺太で実際に野球を行っていた人物であり、『樺太野球史』にはそうした小野の樺太における野球経験の様相が描かれている点、つまり本稿でもたびたび引用した小野による批評は新聞からは見出すことのできない樺太野球界の風景を捉えることができるだろう。また知取，本斗，恵須取，眞岡に関する樺太地方野球史の記述は本書独自の史的価値を見出せる点であると考えられる。それでも『樺太野球史』はほとんどが豊原にて活動する社会人野球チー

ムの活動である。その他の地域や、年代の野球についてはさらなる検討が必要となる。

『樺太野球史』からうかがえる樺太野球界の大きな変化として硬式球から軟式球への道具の変化が挙げられる。この言及は小野だけでなく、樺太地方野球史でも確認することが出来る。1930年代後半、小野が見た樺太野球の景色からは硬式野球が消えつつあった。1935年以降、軟式球の試合記録が急増しており、1938年には8割以上の試合の結果が軟式球のものとなった。小野の所属する逋信も硬式球をやめ軟式球へとチェンジした。そして1939年になると豊原で最後まで硬式球を使用していた庁鉄野球部が解散となった（小野, 1940, p.313）。

昭和十年は豊原野球界にとって淋しい年だった。この年より逋信課野球部が全然硬球をやらなくなったのである（小野, 1940, p.216）

樺太の野球界で一番淋しかったのは、なんといっても昭和十一年のやうな気がする。昭和十一年は逋信課が硬球をやめて足掛二年目である（中略）硬球ばかりではなく、野球そのものが一番下火になった年だった。昭和十一年にはこんど軟式が大いに盛んになった野球熱がもりかへされ十三年には硬球復活の噂さへ立ち、軟式野球はかつて無い程盛んになり、日曜日毎に野球大会があり、職業野球団、などが来島して野球熱は大いに上った（小野, 1940, p.230）

1936年は「軟式野球はかつてない程盛ん」で、職業野球チームの来島もあり「野球熱は大いに上がった」。しかし、小野はその年を「樺太の野球界で一番淋しかった」と回顧する。それは何故か。硬式球による野球の機会がほぼなくなったからである。

果して硬球は樺太に復活するであらうか？僕は百パーセントだめではないかと思ふ。それは、鉄道はとも角、本庁や逋信課あたりで、今新に硬球をやらうとすれば、千五百円以上はそんなことがあってもかゝるだらう（中略）野球の選手は、おそらく内地からは来ないだらう。内地そのものが既に人間を不足してゐるのであるし、まして五十円や六十円では絶対に来ないと思ふ（中略）それに正直なところ、いろんな意味で樺太の野球選手は決していゝ待遇をうけなかった（中略）優れたい、選手はみんな樺太を去ってしまった（中略）兎に角斯う云う訳で、硬球復活は泣き〜あきらめるより仕方あるまい（小野, 1940, pp.306-307）

真の野球の面白さや、味はひは、実は硬球の野球の試合にあるのであって、軟式野球は、面白い点に於ては数段その値打ちが下るのである。これは野球をする人も、観る人も決して異存は無いこと、思ふ。（小野, 1940, p.307）

なぜ硬式球は下火となり軟式球が拡大したのか。さらに硬式球から軟式球への変化は地域によって時期に差があるように見受けられる。小野目線の豊原では1935年以降であるが、知取では1928年に樺太毎日新聞主催の軟式野球大会が始まり、真岡では1931年には軟式球が「物凄い勢いをもって」広がりを見せていたのだ。このことは樺太における野球の競技水準や道具の輸入、施設環境、指導者や経験者の流入状況などより広範な視野で検討していく必要のある課題であるといえよう。

付 記

本稿は体育史学会第8回大会発表報告に加筆修正したものである。また論文作成にあたり令和2年度日本体育大学学術研究補助費の助成を受けた。

注

- 注1) 例えば宮崎・安藤・立上（1932）、湯川編（1932）、大島（1932）、小林編（1969）、岩崎（1980）、西脇（1996；1999；2000）が挙げられる。
- 注2) なお野球に限らなければ樺太におけるスキーの展開を明らかにした新井（1995；1996a；1996b；1997；1998；1999；2012）の研究群がある。しかしこれらも主たる史料として『樺太日日新聞』が用いられている。
- 注3) 『秋田魁新報』には小野庄次郎による寄稿が1930年1月から1931年12月にかけて計63回確認することができる。
- 注4) 古書店である風船舎のHPには『樺太野球史』のページが売り切れのままで残っている。<https://fusensha.ocnk.net/product/3251>（2022年3月25日最終確認）

文 献

- 会田理人（2012）『樺太日日新聞』掲載樺太実業団野球関係記事：目録と紹介。北海道開拓記念館研究紀要，40: 183-198.
- 会田理人（2015）日本領南樺太の実業団野球大会。北方地域のひとと環境の関係史 研究報告：177-200.
- 会田理人（2018）全道樺太実業野球大会。北海道博物館研究紀要，3: 67-77.
- 秋田魁新報（1930）或る友に1. 1月24日付3面。秋田夕刊.
- 秋田魁新報（1931）故郷新屋をおもう1. 8月6日付3面。秋田夕刊.
- 新井博（1995）樺太スキー倶楽部による大正2年の指導者

- 講習会. 日本スキー学会誌, 5(1): 133-143.
- 新井博 (1996a) 明治44年2月11日開催第1回樺太島技大運動会の持つ意味. 日本スキー学会誌, 6(1): 158-169.
- 新井博 (1996b) 樺太のスキー黎明期における樺太スキー倶楽部について: 大正2年の誕生と活動を中心に. 成田十次郎先生退官記念会編, 体育・スポーツ史研究の展望 国際的成果と課題 成田十次郎先生退官記念論文集. 不昧堂出版: 東京, pp.436-451.
- 新井博 (1997) 日本スキーの開拓者桜庭留三郎. 日本スキー学会誌, 7(1): 217-230.
- 新井博 (1998) 大正12年第1回全日本スキー選手権大会参加者への樺太の取組みについて. 日本スキー学会誌, 8(1): 37-50.
- 新井博 (1999) 樺太におけるノルウェー式スキー技術の導入と普及について: 金井勝三郎の大正4年から大正6年における活動を中心. 日本スキー学会誌, 9(1): pp.151-162.
- 新井博 (2012) 金井勝三郎の普及活動からみたスキー技術の変化について. 楠戸一彦先生退職記念論集刊行会, 体育・スポーツ史の世界: 大地と人と歴史との対話. 溪水社: 広島, pp.367-385.
- 中央情報社編 (1941) 樺太官庁会社紳士録. 東樺日日新聞社: 知取.
- 岩崎茂 (1980) 白球は鞍山の空高く: 昭和製鉄所野球部の回顧と満州の野球界. 牟田正孝: 東京.
- 小松誉重 (1940) 樺太野球史を祝す. 小野庄次郎, 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原, p.9.
- 小林完一編 (1969) 満洲倶楽部野球史. 満鉄会: 東京.
- 梶原一郎 (1940) 恵須取野球史 (昭和四年頃より). 小野庄次郎, 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原, pp.472-478.
- 金光誠・天田英彦 (2001) 植民地朝鮮における野球大会創出の意味: 全国中等学校野球大会に着目して. 流通科学大学論集 人間・社会・自然編, 14(2): 1-11.
- 樺太敷香時報社編 (1937) 樺太年鑑 昭和12年 [第7回]. 樺太敷香時報社: 敷香.
- 川西玲子 (2014) 戦前外地の高校野球: 台湾・朝鮮・満洲に花開いた球児たちの夢. 彩流社: 東京.
- 林勝龍 (2012) 日本統治下台湾における武士道野球の受容と展開. 早稲田大学スポーツ科学学術院博士論文.
- 宮崎愚一・安藤忍・立上武三共編 (1932) 大連實業野球團二十年史. 安藤書店: 大連.
- 内藤勉 (1940) 眞岡野球史. 小野庄次郎, 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原, pp.466-471.
- 西脇良朋 (1996) 臺灣中等学校野球史. 西脇良朋: 加古川.
- 西脇良朋 (1999) 満州・関東州・華北中等学校野球史. 交友プランニングセンター: 西宮.
- 西脇良朋 (2000) 朝鮮中等学校野球史. 神戸新聞総合印刷: 西宮.
- 小野容照 (2017) 帝国日本と朝鮮野球: 憧憬とナショナリズムの隘路. 中公叢書: 東京.
- 小野庄次郎 (1940) 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原.
- 小野庄次郎 (1951) 雄物川畔: 小説集. 東北パルプ株式会社秋田工場従業員労働組合文化部: 秋田.
- 大島勝太郎 (1932) 朝鮮野球史. 朝鮮野球史発行所: 京城.
- 大島清蔵 (1951) 血のつながる親しさ. 小野庄次郎, 雄物川畔. 東北パルプ株式会社秋田工場従業員労働組合文化部: 秋田, pp.1-2.
- 坂本邦夫 (2020) 紀元2600年の満州リーグ: 帝国日本とプロ野球. 岩波書店: 東京.
- 佐藤和夫 (1940) 知取野球史 (昭和二年より十三年まで). 小野庄次郎, 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原, pp.441-455.
- 高嶋航 (2021) 満洲スポーツ史話 (I). 京都大学文学部研究紀要, 60: 163-262.
- 高嶋航・金誠編 (2020) 帝国日本と越境するアスリート. 塙書房: 東京.
- 丹野良次 (1940) 本斗野球史. 小野庄次郎, 樺太野球史. 樺太刑務所印刷部: 豊原, pp.445-465.
- 豊原町役場 (1935) 豊原町勢要覧 [昭和10年度] 豊原町: 豊原.
- 湯川充雄編 (1932) 臺灣野球史. 台湾日日新報社運動倶楽部: 台北.
- 全国樺太連盟編 (1965) 樺太人名録 昭和30年版. 全国樺太連盟: 東京.

〈連絡先〉

著者名: 冨田幸祐
住 所: 東京都世田谷区深沢7-1-1
所 属: 日本体育大学オリックススポーツ文化研究所
E-mail アドレス: k-tomita@nittai.ac.jp